

障がい者に私たちができること

熊野市立有馬中学校3年

川端 菜夏子

皆さんは障がい者について、どんなことを思いますか？正直何も思わない人もいるかもしれませんが。人それぞれ抱く感情はさまざまです。しかし、間違った感情を抱いてしまうと、それは差別につながることもあります。

中学二年生のとき、学校に障がい者の方がいらして、色々なお話を聞いたり、実際に全盲、車椅子を体験する機会がありました。車椅子の方や、視覚障害で白杖を持った方など、一目でわかる身体障害者は私の身近にはいません。だからこそ、この経験はとても貴重でした。実際に全盲を体験するとき、ゴーグルで視界を完全に閉ざした状態で、階段の上り下りなどをしました。友達をサポートがあっても一歩進むだけですごく不安で、階段を下るときは踏み外さないかとすごく怖かったです。車椅子を体験した時は、角を曲がる、段差の上を通るなど、とても苦戦しました。体験してみて、視覚障害がある方、車椅子の方にとっては、障害がない私たちが当たり前に行えること一つ一つがとても難しいのだということに気づかされました。

その後は、事故で両脚をなくし、車椅子で生活されている方がお話をしてくれました。私は最初その方に対し、「かわいそう」と、思ってしまいました。なぜなら、脚がないから、車椅子だから、何も楽しいことができないんだと思ってしまったからです。しかしその方は、とても生き生きとしていました。自分で車に乗り、ドライブをしている動画や、車椅子バスケットボールを楽しんでいる動画を見せてくれました。「なんだ、障がいがあっても、楽しい、幸せ、と感じるということは私と何も変わらないんだ。」と思い、「かわいそう」という感情を持ち無意識に差別をしてしまったことにとっても反省しました。確かに、身体障害がある人は、バリアフリーと呼ばれる施設や、介助は必要ですが、障害がある人もない人もみんな同じ人間で、「楽しい」「幸せ」という感情を持つことは同じなのです。それなのに、私たちは、「障がいがあるからかわいそう。」「障がい者は何もできないから私たちが助けてあげなければならない。」そういう思い上がった感情を抱いてしまっています。その時点で、それは一種の差別につながっています。「かわいそうだから助ける」は、決して思いやりではないのです。

視覚障害者が白い杖を頭上に掲げて立ち止まる、その意味をご存知ですか？「白杖 SOS シグナル」と呼ばれ、このサインを見かけたら、助けを求めているという意味です。このような SOS サインもありますが、助けを求めにくい態度や環境で、助けを求められない場合もあります。だから、私たちが障がい者の方とともに生活がしやすいことがなんなのかを考えていくことが必要です。街中にたくさん見かける点字ブロックの上は歩いたり、物を置かない。車椅子の方が通る時は道を開ける。電車、バスの優先席は空けておく。中学生の私たちにもできることです。小さなことからでも、障がい者の方が過ごしやすい環境を作ることが何より大切なのだと思います。

もし、どこかで障がいがある方と遭遇したら、私はこうしようと思います。まずその人が今、どんな状況で、どんな助けが必要か。または必要でないのか。できることは自分でしたいと思うのが人間の当たり前の感情です。だから、私が必要だと思った助けは、本当に障がい者の方にとって必要か、お節介になっていないのか、考えて行動したいです。障がい者も健常者も当たり前と同じ人間です。ただ、少し違うことは健常者よりも不自由なことがあるということだけです。たったのそれだけのことで差別が起こるのは絶対におかしなことです。障がいがある人、ない人関係なく、みんなが過ごしやすく、互いに協力し合え、共存しやすい社会になるよう、私たち若い世代が未来につなげていきたいと思います。